

リハ医の思い 第七回

最期までリハビリができた

「櫻咲……！　なんと素敵な」

生芝 幸夫

実母、のぶ 満九十三歳は、十一月末から諸事情でリハビリ入院していた。それまでの状態は室内ピックアップ歩行器歩行数メートル程度、認知症（中等度）。日常動作全般に要介助（軽度～重度）。週四回のデイケア、ここ一～二年は月に一～二週のショートステイ利用でなんとか自宅介護していた。

一月末入院中に心不全急性増悪で危篤状態になった。九十過ぎればいつ迎えが来ても（私の覚悟は）大丈夫、と思っていたが、病室のベッド上で、その呼吸や体動がつからそう、苦しそうなのを目の当たりにすると（ある夜、片手を宙に上げ、絞り出す様に「あゝっ、助けてえゝ」と言うのを見てしまった……）、このまま「天寿全う」と、

覚悟を決めることはできなかった。「九十だろうと百だろうと（一部省略）できるだけのことをした方がいい！」と言ってくれる同僚や、私の心情を思っけて背中を押してくれるスタッフがいて、急性期として一般病棟で治療を受けさせた・・・

その後、治療の甲斐あって心不全は軽減し命ながらえたが、その後の二〜三週間で、体力・気力低下、衰弱・認知症進行し、歩行困難どころか端座位保持や寝返りさえ困難、食事自力摂取困難状態となった。胃瘻や中心静脈からの栄養での施設入所（イコール、コロナで面会禁止状態）はもとより望まなかったので、それからは日曜も祝日もなく、三度三度必死で母の食事介助をした。離乳食を赤ん坊に食べさせる如くに・・・一進一退・・・口に入れてもすぐ吐き出されたり、やっと食べ終わったと思ったら五分も経たないうちに全部嘔吐されたり・・・そうしてこうして何とか介助の仕方、食材形態の工夫で、二進一退・・・高カロリーゼリーや、プリンや、ヨーグルト、濃厚栄養ジュースなどがメイン。三週間ほどでなんとか最低限の必要カロリーが摂れるようになった・・・と思ったら、たった一日の熱発を機に

また全く食べなくなってしまうた！頑なに口を開けなくても、やつと口に入れたものを反射的に出されても、根気よく、離乳食を食べさせてもらった「お礼・お返し」と思って、「もっと大きくお口を開けてえ・・・」「かみかみかみ・・・はい、ゴックンして〜」挫けずに、根気良く、粘り強く、状況は受け入れても諦めず、耐えて忍んで、堪えて、何とか、やっと・・・

そんなこんなな時期でも、毎日リハビリ（嚥下、作業、理学）があった。大きな声を出しても、体を揺さぶってもすぐ目を閉じ、覚醒が悪い時もあったが、他動的に手足の可動域訓練、ストレッチをしたり、体位交換したり。起きているときは、風船を投げつけると反射的に手を出して打ち返したり・・・バイタルがほぼオーケーなら車椅子に乗せて、機嫌が良ければ、室外に出たり・・・こんな時は「あそこへ行く」「もう帰る」「部屋に入る」などの自発的な言葉も聞いた。

D棟の屋上に上がって植木や花を見せる、その名前を尋ね、答えさせる。天気良ければ遠くに牛久大仏が見える。あれなーに？と聞く

と、なんと胸の前で合掌した！風が強い時、気温が低い時は、D棟からA棟への通路で風船付き、ベルクロ付きピンポン球ダーツ、水分摂取練習、脚の運動、調子がすごく良ければ重度介助でつかまり立ち動作などのリハビリをした・・・晴れていれば北側の遠くに山が見える。あれなーに？「・・・ふじさん」違うでしょ、家の裏からも見える山、よく見てえ、に尾根をたどる様に指をゆるいMの字に動かしてから「つくばさん」と応えた。

リハビリが本人の生きが이었다かどうかはわからないが、私にとっては入院中唯一と言ってよい心晴れる楽しい時間だった、できる限り仕事の調節をして時間を合わせリハビリに同席した・・・

各種スタッフ皆様のおかげでその甲斐あって三月上旬には状態が少し持ち直し、安定し、なんとか年齢、現状に見合う必要最小限のカロリーがやっとやっと取れるようになり、訪問診療・看護の指導を受け（中心静脈カテ留置での必要十分な補液はせず）水分は週三回皮下に点滴する事にし、ケアマネさんと最大限の在宅サービスを計画し、

三月十六日に三ヶ月半ぶりで自宅退院（イコール自宅での看取り覚悟・・・）となった。

退院時は東京でやっと桜の開花が聞かれた頃だった。退院がもう一週間遅ければ三階の棟間の通路から見える大きな桜の（最期の）開花が見られたかもしれない・・・

中学の柔道部の仲間やはり九十歳の母親（心不全、椎体骨折で入退院繰り返してる）を介護している友人と以前からラインでやりとりしていて、「桜が観られるといいねえ・・・」「いやあ五月の誕生日までは・・・」などとやりとりをしていた。

その友人が「自宅の桜の枝が、柵をこえて隣の家の方まで伸びてしまったので、切るので持って行ってもいい？明日は家に居る？」とのこと。（本当は母のためにわぎわぎ切って？）二十日の春分の日に持ってきてくれた。五十〜六十センチの二〜三本だと思っていたら、軽トラの後ろに積んできて、なんと一メートル五十センチ前後の、蕾のたくさんついた枝を十本ほど！早速自宅にある（介護のために使う

かもしれないと思って買っておいた新品の)特大のバケツを花瓶がわりにして全部生けて縁台に飾った。介護ベッドから、障子とカーテンを開けると廊下越しに見える。もらった時は咲いている花は数えるほどだった。なんの花?に「んめ(梅)」。切った枝の蕾はあまり咲かないかと思ったら次々に咲き出し数日で見頃になった。なんの花?に今度は「さ、く、ら・・・」と確かに答えた。何回も車椅子に乗せ廊下に出てよく観させた。やがて見事に満開になり、風が吹けば花吹雪になった。四月に入ると新緑の葉桜に代わって行った・・・

桜の花とは反対に食欲は徐々に減ってゆき、満開を過ぎる頃には水分さへもほとんど受け付けなくなっていた。頑張って無理に口に入れて誤嚥や嘔吐で苦しむよりは・・・と次第に思える様になっていった。時の流れで・・・現実的に・・・覚悟ができていった。

車椅子に乗せても、傾眠傾向でうとうと、手足を動かすことも、問いかげに声を出すことも徐々になくなっていった・・・毎回小一時間の食事介助で必死だった頃は、それが(おむつ交換と合わせて)介護

のほぼ全てだったが・・・もうその必要もない時期が来ている、と身にしみて受け入れると、かえって時間に余裕ができて、顔や髪の整容に気を使ったり、お気に入りの本や絵本を見せたり、ベッドサイドの椅子に座って一緒にテレビの歌番組を見たり、ある意味で本当に言葉通り「寄り添う」ことができた・・・夜は、いつのまにか眠っているそばで、消灯と決めた九時まではと、自分の本を持ってきて読んだり、ロックの焼酎を飲んだり・・・ずっとそばに居た・・・

リハビリ入院の時期からすると約三ヶ月、（自分も術後で入院していたのと）自分の職場に入院していたので、（多くの人がコロナ禍で肉親でも面会禁止の中）朝は七時から夜は八時過ぎまでかなり濃厚・濃密に接することができた。私が定年退職して家に居ればなんとか可能だが、現状では自宅退院は難しいと思われ、なんらかの施設、療養型病床に退院しても医師なら頼めば厳しい面会制限はされないと思ったので、そうしようかとも考えていたが、以前リハビリ中に「（経管、経腸になっても）先生なら在宅（介護）できるんじゃない

の？」と言われたことがあり、確かにおむつ交換や着せ替えはできるし、車椅子乗り降り介助もできるし、その他の管理も可能だし、ヘルパーさんを頻回に入れればなんとか・・・それも有ったが、自宅から少し遠いが顔の効く病院の介護医療院に退院させようかと姉妹に言って決まりかけ、いよいよになった時、妹が「十一月末から」一度も家に帰れなかったんだあ・・・」と呟き、その後メールで「一度家で見て・・・ダメだったらその病院にすれば云々」と。これで在宅ケア（家での看取りまで）を強く決心した・・・牛久在住の妹と、曜日と時間帯で担当の日を決めて自宅で（もうそれほど長くはないだろう）母を見た。付き添った。私は（有給休暇を使って、）火曜午後、水曜一日、土曜午後、日曜日を担当。朝夕の食事介助とおむつ交換は毎日私がやった。（時に妻と息子も手伝ってくれた。）その甲斐あって、妹は約三週間すぐそばで濃厚に（入院中はできなかった）母の相手をすることができ、訪問リハビリや訪問入浴も近くで見られ、その他いろいろ関わられた。その間、山形から姉が来て、姉にも一週間みっちり母を介護させることができた。食事介助や整容や風船遊びなど

してくれた……自分としても姉妹に対しての心残りがなくなった。

お通夜の時、始まる前に司会の女性が「どんなお母さんでしたか？」と聞いてきた。優しいお母さん、しつけが厳しかった、料理が上手だった、働き者だった、などの短文での返答を期待したのだろうか……母は六十歳頃までは苦労の連続で、その後も病気、手術で入院など大変な時期があったので、とても一言では言えず、思わず「何分くらいで……」「原稿用紙何枚くらいで……」と言ってしまった。

「早くに母を亡くし、十代で弟二人妹一人をおぶったり手を繋いだりして空襲を逃げ回ったりから始まって、父と結婚してしばらくは農家の大家族と同居で、母までご飯が回らず食べられなかったり、一番最後に入るお風呂は底が見えなかったとか……四十八歳で夫を大病で亡くし……辛い思いや、苦労の連続で……とてもとても簡単には……姉と妹に聞いてください。」と言ってしまった。花作りが好きだった、とか田舎料理が美味しかった、とか和裁ができた、などと答えていた様な……後から姉が「十年前、新聞に大きく載ったこ

と（六段抜きでA4用紙より大きく）を言えば・・・」と。通夜の後、帰宅後式場に戻って、例の新聞記事のコピーを担当者に渡しておいた。翌日の告別式では記事の内容を使って母と私の（自分で言うのも恥ずかしいが他人から見れば）絶対的な信頼関係、特別強い絆を上手に紹介してくれた。

式場には和洋の各種の生花が二十基以上並んだ。祭壇に収まらずフロアにまで続き壮観だった（花屋さんがレイアウトに相当苦心して何度か並べ変えていた）。

母は花が好きだった・・・

家の庭やすぐそばの畑には母が作ったいろいろな花が、季節ごとに本当に多くの花が咲いていた。・・・今思い出すだけでも・・・水仙、あやめ、花しょうぶ、沈丁花、椿、レンギョウ、ツツジ、梅、山桜桃、梅、くちなし、三色すみれ、都忘れ、鳳仙花、ホウヅキ、キンセンカ、クロッカス、ヒヤシンス、マリーゴールド、デイジー、ひなげし、マーガレット、チューリップ、ダリア、カンナ、野萱草、ギボウシ、龍

の髭、竜胆、おもと、グラジオラス、サルビア、鈴蘭、芝桜、松葉牡丹、白粉花、朝顔、夕顔、桔梗、われもこう、オミナエシ、タチツボスマイレ、睡蓮、鶏頭、葉鶏頭、葉牡丹、芍薬、百合、夾竹桃、初雪草、撫子、ひまわり、立葵、彼岸花、小菊いろいろ・・・まだまだ。

特筆すべきはコスモスで家の前の畑、路肩から、新しい県道の造成地まで百メートル以上に広がり咲き誇ったまさに秋桜街道、車を止めて花を摘んで行く人が何人もでた・・・

四月七日その日は水曜で、私が当番で朝から一日見る日だった。六時頃起きて、六時半にオムツ交換。十日ほど前から経口摂取ほぼゼロなので、便はほんのわずか、二日前から尿もほんの少々。交換が楽になった、と言っても協力動作がない大人を独りで何回か交互に左右の側臥位にしながらオムツ、尿パッド交換し、着替えをさせるのは慣れてもそうそう簡単ではない。その後、自分で朝風呂に入ってさっぱりしてから七時頃再び母の元へ。何か飲む？に首を縦にふる。最新の新品のレンタルベッドを電動でヘッドアップ五十度くらいにして、

誤嚥の少ない（十秒めしの様な）補水液成分のゼリーの容器を絞り出す様に口に持っていくと、今度は首を横に振って固く唇を閉じた。こ
こ一週間ほどはこんな感じ・・・食事（と言ってもカロリーやタンパ
ク質重視の栄養補助食品）はもう諦めていてトライしない。緩く絞っ
たフェイスタオルで顔を拭き、目脂、口角の汚れを取る。さらに髪を
撫で付け少し濡らしたあと、母が使い慣れたブラシで何度も何度も
梳かしてやる。

じゃあテレビ見てて、と言ってNHKのEテレの子供向けの番組
をつける。朝は楽しい歌や音楽が多く、画面もカラフルで、人形が喋
ったり、子供が上手に踊ったりと普通の？大人が見ても面白い。母は
あまり表情のなくなった顔でテレビに視線を送っている・・・

ベッドサイドに自分の朝ごはんを持ってきて一緒にどうか自分
だけ食べる。時々ふざけて母の口に食べ物を持っていくと、無表情で
あちらを向いて口を固く結ぶ。そんな動作が幾分力なく・・・オムツ
交換時の体交の抵抗や、テレビを見る表情がいつもよりさらに弱々
しかったか・・・

ベッドアップでテレビを付けたまま食べた食器片付けに行き、その後洗濯機を回す。天気が良いのでタオルケットや、ベッドシーツなども洗う。再び母の元に行き、介護用品を整頓し、部屋を片付けたりしていた。その都度母に目を送る。うとうとしているので、絵本やお気に入りの小雑誌を手の届く所に置いてページをめくったりして目と頭を刺激する。部屋干しの昨日の洗濯物を片付け、コーヒーを入れて来てベッドサイドで新聞を見ながら飲んだり・・・いつの間にかとうかいつもの様に母は完全に目を閉じて眠ってしまった。洗濯機がピーピーと言って止まる。大物は外に干しに行く、屋外は朝から日差しが強く暑いくらいのいい天気。小物は廊下に部屋干しながら母に視線を。いつもより大きく口を開けどっぷり沈み込む様にぐっすり寝ている。ベッドサイドの小型テーブルや机の上を片付けていて・・・ハッと、横目で無意識に感じ、母をみると呼吸をしてない！！！！（頭の中で）「しまった・・・」すぐ橈骨動脈に触れる。拍動触知せず、左右の頸動脈に両手の指を当てる。拍動がない。大声で、のぶちゃん、のぶちゃん。体を激しく揺すって、母ちゃんっ、母ちゃん、母ア

ーチャーン！全く反応がない。まぶたをあげ瞳孔を見る。左右とも2
〜3ミリ、正円。目の周りをいじられても反応はない。まさに死んだ
様……無意識で心臓マッサージ……入院中「急変時は心肺蘇
生はせず」にサインしたはずなのに……すぐやめる。ああっー死ん
でしまったぁ……と全身の力が抜けた……

昨日の訪問診療時「十日前から経口ゼロ、二日前から尿が出ないが、
後どのくらい……」に「今の様な状態でも皮下への捕液で一週間、
二週間、場合によってはひと月になる人もいます。」との事だった、
午後からはリハビリで車椅子にも乗せてもらったし、笑顔や発語は
なかったが、何度か風船付きもできたので……まさか「今日」とは
思わなかった。心の準備はできていなかった。

自分の鼓動が高鳴る……何をすればいいんだ、落ち着け！まず訪
問看護の救急時の連絡に電話を入れて「母が心肺停止状態です。」と。
その後、妹、姉、妻に急変のメールを入れたら、あとはやることにな
くなって……少し冷静になった。改めて二人つきり。じっと母の
顔を見る。遠いところへ往ってしまった表情。

だんだん落ち着いてきて・・・思った。

まさに眠る様に、ではなく眠ったまま、天に召されたのだ。「最期」はある程度、（私にとっては耐え難い）肩や顎での苦しい呼吸を覚悟していたが、それが全く無かった。母の手をとったり、顔をじっと見つめてはいなかったが、私が同じ部屋にいて、すぐそばにいて、それを確認して母の魂はスーッと天に昇ったのだ。

前日には車椅子に乗ってリハビリもやったので、ある意味、末期の中でのピンピンころりでもあったのだ。

自宅のいつも寝ていたところから安心して浄土に往ったのだ・・・

これ以上の最期はないではないか・・・

母を桜に喩えたことはなかったが、戒名（浄土真宗では「法名」）の「櫻咲院釋慈照延幸大姉」には一瞬驚いたが、気に入っている。母と縁台の桜を見ている時は予想もしなかったが、菩提寺の住職がその様子をずっと見ていたかの様な・・・おしゃれな・・・私の字も入っ
ていて・・・素敵な法名だと思う・・・

さまさまの　こと思ひ出す　桜かな　（芭蕉）

初めてデイケアに行く日、車椅子ごとマイクロバスに乗せられ、それを見送ったこと。

初めてショートステイの話をした日、何度も「行かなくてもいい？家にはダメか」と小声でわれたこと。

ケアマネさんに「これからはどんなふうに暮らしていきたいですか」と聞かれた時、すかさず私を指差してその指で二〜三度私の方を突つつくようにして微笑んだこと。「これ（私のこと）、これの言うとおりにする」と言いたかったのだと思っている。私は、母が作った最高傑作なのだろう・・・

あとは・・・目の前が潤んできて書けない・・・

反省や後悔が後を絶たない・・・

何かがはずれると嗚咽、号泣、慟哭が止まらなくなる・・・

介護は、

どうしてこんなに

無駄で

貴いのだろう。

認知症は、

どうしてこんなに

腹立たしく

愛おしいのだろう。

母は、

どうしてこんなに

小さくて

大きいのだろう。(文献1から)

哀しい哉、悲しい哉、復(また)悲しい哉。

悲しい哉、悲しい哉、重ねて悲しい哉。(空海)

令和三年四月三十日

参考文献

- 1、満月夜の、母を施設に置いて 藤川幸之助
- 2、修養 新渡戸稻造
- 3、幸せ介護 鎌田實
- 4、ラジオ深夜便母を語る 特選集 Zエヌサービスセンター
- 5、聖書と歎異抄 五木寛之・本田哲郎
- 6、「死」とは何か シェリー・ケーガン
- 7、14歳の君へ 池田晶子
- 8、生きがいについて 神谷美恵子
- 9、蟬しぐれ 藤沢周平
- 10、黒龍の柩 北方謙三
- 11、芭蕉 俳句集 岩波文庫
- 12、空海 言葉の輝き パイ インターナショナル